

ワークライフバランスの理念と実践 —イクメン(育男)の多い会社は業績アップ— 渥美由喜さん講演会を開催しました

早稲田文化芸術週間の一環として、2010年10月22日(金)、本学大隈記念講堂小講堂において、現在最も注目されているワークライフバランスの論者である渥美由喜さん(東レ経営研究所)の表記講演会を開催しました。220名以上が、育児休業2回取得の旬の“イクメン”渥美さんのお話を、1時間半にわたって聴き入りました。男子学生の参加も多数ありました。

2回の育児休業取得のご経験、ご尊父の介護体験、17年間にわたる地域の公園での「子ども会」のボランティア活動という実践と、企業コンサルティング業務での現場主義の研究スタイルに基づく、ワークライフバランスとダイバーシティの推進について、示唆深いお話をいただきました。

①ワークライフバランスとダイバーシティ、②2回の育児休業と父の介護体験、③イクメンを阻む壁、④男性のワークライフバランスに取り組む意義、⑤イクメンは、育自と育地～自分が育てられる、地域を育てる～という5つの柱に沿って、講演は進みました。男性がワークライフバランスの意識をもって子育てにかかわることが、いかに自身の仕事を効率化し、ひいては職場をも効率化し、だれでもいつでもどこでも働きやすい職場づくりに貢献し、社会の牽引力になっていくかを熱く語られました。片働きモデルから、共働きモデルへとビジネスモデルの変革を迫られる現在、イノベーションが要諦であり、男性の育児というマイノリティ体験は、大いに生きてくる、イクメンはチャレンジ精神に富み、タイムマネジメント力もつき、堅固なライフはワークに打ちこむ源泉となる、と企業の生産性アップにも繋がるデータを示しながら解説されました。

また、子どもがいなくてもイクメンになることは可能だと、「子ども会」という地域のボランティア活動体験に基づく、子どもたちへの声かけ、心かけの実践を示され、イクメンが増えれば、地域力が高まる。持続可能な働き方、地域社会をつくりあげるには、イクメンこそが切り札だと、説得力をもって、その重要性を述べられました。講演の最後に、学生のうちから意識の高い人たちが仕事に入ると、世のなかも、地域もかわっていくと、エールが送られました。

講演後は活発に質問が飛び交い、地域社会の繋がりが薄い場合はどうやって地域に入っていけばよいか? 子育てにかかわっていくのは、小さいうちよりも子どもが大きくなってからのほうが重要ではないか? イクメンをもつ奥さんはどのような態度でおられるか? 等の率直な質問に、渥美さんは真摯に答えてくださいました。

